

# 鶴山書院報

第12号

公益財団法人  
孔子の里

〒846-0031  
佐賀県多久市多久町  
1843番地3 東原庫舎内  
TEL 0952-75-5112  
FAX 0952-75-5320

E-mail ko-si@po.taku.ne.jp  
URL http://www.ko-sinosato.com

発行人  
理事長 横尾 俊彦

## 石川忠久先生を偲んで

漢詩文化と日本人の志



公益財団法人孔子の里

理事長 横尾 俊彦

(多久市長)

公益財団法人孔子の里は、多くの方々にお世話になりつつ、歩を一つ一つ刻んでおります。旧藩校時代の教育システムと教本の真髓や、そこで学び人物を錬磨させた先達を想う時、教育の重要性を思わずにはおられませんし、賜ることのできた多くのご厚情やご指導・ご支援に感謝の言葉しかございません。今回は、この夏に今生の別れとなった先達について少し述べさせていただきます。



石川忠久先生

本財団の恩師といえるのが、東京湯島聖堂の管理運営を担う公益財団法人斯文会の前理事長で二松学舎大学学長を務められた石川忠久先生です。全国では

NHK漢詩紀行の指導を永年にわたって務められました。各地に石川先生に私淑された方も多いためと思います。

### 全国ふるさと漢詩コンテスト

本年七月十二日に石川忠久先生は天寿を全うされ、不帰の人とられました(享年九十歳)。当財団で主催する「全国ふるさと漢詩コンテスト」の審査委員長として、初回からご指導ご貢献いただきました。毎年秋にはこの地に来訪くださり、満面の輝く柔和な笑顔と朗々とした中国語の音律による漢詩の朗誦も交えたご講演をいただきました。

あたかも人物事典からすぐに引用されるかのように李白、白楽天など高名な詩人の有名な漢詩はもとより、その生年や没年、人生の節目の年もスラスラと板書され、漢詩のみならずその生きざまも交えて語ってくださいましたことが懐かしく思い出されます。

毎回の来訪にあわせて即興作詩も墨筆で書きとめてくださり、講話の結びには聴講者に示し、熱く語りながら紹介してくださいました。「小都市ながら漢詩文化の重要性に着眼して、毎年漢詩コンテストを継続する多久市は実に貴重な存在です」と毎回激励下さいました。

先生によれば、明治時代が始まった頃、日本文化の重要性が忘れられないようにと三島中洲先生ほかの碩学の先人が尽力されたのが漢詩漢字の教養です。当時も宴席や会合では、即興の漢詩創作に興じて、朗々と読み合うこともしばしば。その内容には志を立てて事を為そうとする情熱や、人生での惜別の情深き描写などが心に響きあったのです。まさに教養人、風流人であることは必須だったとも言えます。そんな教養や文化は今では忘れられたようになっていきます。

また、江戸時代からの教育では、例えば子どもは論語や孝経などを学び、帰宅後は祖父や父親の膝の上で「ここはどう読むの」「なんという意味なの」と白文の論語などを見ながら親子孫で学びあっていたとのこと。なんとも微笑ましく頼もしい学びの光景です。

そんな取り組みの累積は、人々に志操堅固の気風を醸し出し、迷うこと多き人生に確固たる人生の羅針盤を提供してきたと感じます。

### 笑顔と人柄がひらく輝き

終始笑顔で、来るもの出逢うものを、者でも物でも、優しく歓迎され、時流にも明晰で、しかも人倫に尊い教えの気風を広めて下さいました。ここに改めて永年のご尽力とご厚情に深甚の感謝と敬意を表し、その御霊の安らかなることを祈念申し上げます。

石川忠久先生ありがとうございました。

# 石井鶴山の「北海観風草」の旅(其の三)

— 源氏の英雄たちを偲ぶ —

熊本大学 教授 中尾健一郎

石井鶴山(一七四四—一七九〇)は佐賀藩第八代藩主鍋島治茂(一七四五—一八〇五)の侍講として、参勤交代には基本的に毎回同行したが、天明六年(一七八六)春の帰国の際には、藩主一行とは別に日本海沿いの道を選んだ。

山陰道の儒者たちや名所旧跡を訪れ、味わい深い作品を多数残した。今回はその中から『平家物語』ゆかりの古跡を詠んだ作品を二首紹介しよう。

まずは俱利伽羅峠の戦いを詠んだ詩である。この作品には次のような端書きが添えられている。

埴丹生八幡の神庫、源義仲の記室、大夫坊覚明の書する所の祝文を蔵む。

「埴丹生八幡」とは現在「埴生護国八幡宮」と呼ばれる古社である。富山県小矢部市埴生にある。その神社の宝物庫に木曾義仲の書記(事務官)覚明の書いた戦勝祈願文が奉納されているという。

木曾の山奥に住んでいた義仲が挙兵して三年後に一気にその名を世にあげたのが俱利伽羅峠の戦いである。平維盛率いる平家軍七万に対して、義仲の軍隊はわずか四万という圧倒的な兵力の差があったにもかかわらず、義仲は平家の大軍を破った。

義仲のブレーンとして活躍した覚明が、義仲に命じられて認めた戦勝祈願文も名文とされ、今もなお

埴生護国八幡宮に奉納されている。

では、鶴山がこの古戦場を通るときに詠んだ詩の本文を見よう。

## 栗殻嶺

源家記室大夫才

横槩揮毫氣壯哉

鉄馬朝嘶日宮杜

火牛夜襲栗峰台

坂山娘子軍容勵

斫罽虎臣兵略開

可憐諸平十餘万

一時坑底骨成灰

## 栗殻嶺

源家の記室 大夫の才

槩を横たえ 毫を揮い 氣

は壮なるかな

鉄馬 朝に嘶く 日宮の杜

火牛 夜に襲う 栗峰の台

山を抜く娘子 軍容勵

罽を斫むる虎臣 兵略開

憐れむべし 諸平の十餘万

一時にして坑底に骨灰と成るを

(『石井鶴山先生遺稿』 作品番号532)

まず首聯では覚明の才気を賞賛する。二句目の「横槩」は北宋・蘇軾の「前赤壁賦」の「槩を横たえ詩を賦す」をふまえて、覚明が曹操と同じく文武に優れた人物であったことを示す。

続いて頷聯では、義仲の率いる源氏軍が埴生八幡宮で戦勝祈願を行い、栗殻嶺(俱利伽羅峠)で平家の軍勢に夜襲をかけたことを詠む。「鉄馬」は鉄の鎧をつけて武装した馬、また騎兵の精鋭部隊をいう。

「火牛」は火攻めに用いる牛。『源平盛衰記』では義仲が多く牛の角に松明をつけて敵方に向けて解き放ち、平家の兵士たちを谷底に追い落としたとされる。

頷聯では、巴御前の奮戦や義仲の機略によって平家に勝利したことを詠む。「拔山」は力持ちの意で、義仲に仕え敵將の首をねじ切ったとされる女武者巴御前の怪力をいう。「虎臣」は国君や王宮の守護者。ここでは平家軍を挟撃する作戦を立てて戦いに勝った義仲を指す。

尾聯では、源氏軍の夜襲を受けて逃げ場を失い、俱利伽羅峠の断崖から落ちて斃殺された平家の十万余の将兵を憐れむ。戦の後、谷底は平家軍の死体で埋め尽くされ、谷川は血や膿で染まったという。今もこの谷は「地獄谷」、川は「膿川」と称される。

『源平盛衰記』に記された「火牛の計」は『蒙求』の「田単火牛」の翻案であり、史実ではないとされるが、鶴山は俱利伽羅峠を越えながら自然と『源平盛衰記』に描かれたこの戦の場面を想起し、谷底に眠る平家の武者たちを悼んだのであろう。

次に能の「安宅」または歌舞伎の「勸進帳」で知られる安宅の関の故地(現在石川県小松市安宅町)を通った時の作品を見よう。

## 安宅関

曾提百万罽逆党

曾提百万罽逆党

蓋世功名終不賞

## 安宅の関

曾て百万を提して逆党を

罽にするも

世を蓋う功名 終に賞されず

鱣鯨縦失横江勢

鱣鯨 縦い江を横ぎる勢い  
を失うとも

虎豹猶欲決檻往

虎豹 猶お檻を決して往か

若非関尹物色違

んと欲す  
若し関尹 物色を違うに非

応懼飛将胆気爽

ざれば  
応に懼るべし 飛将 胆気

可憐奇計纒脱厄

憐れむべし 奇計もて纒か  
に厄を脱し

孤忠空泣擁主杖

孤忠 空しく主を擁し杖  
に泣くを

〔『石井鶴山先生遺稿』作品番号533〕

まず首聯では、源義経が百万の軍勢を率いて壇の浦で平家を滅ぼしたにもかかわらず、兄頼朝の怒りを買ってしまい、蓋世の功名を挙げながら、とうとう酬われなかったことを詠む。

続いて頷聯では、義経が権勢を失っても、弁慶をはじめとするその家来たちが義経を擁して関所を破り、奥州に落ちのびようとしたことを詠む。

頸聯では、関守の富樫が山伏に変装した義経一行の正体を見破っていたならば、義経とその一党が派手に暴れたであろうことを推測する。「物色」は人を捜索すること、「飛将」は行動が神速で勇猛な武将、「爽」は勢いがよいことをいう。

尾聯では、弁慶が東大寺再建の「勸進帳」(寺院への喜捨を募る趣意書)を読み上げて富樫を欺き、従者に扮した義経の正体が見破られそうになると錫杖

で義経を打ちすえて、なんとか無事に危機を脱した後、主を打擲した罪を泣いて詫びたことを詠む。

ところで、前述の俱利伽羅峠の戦の「火牛の計」と同じく、安宅の関にまつわるこのエピソードは史実ではなく、南北朝時代から室町初期にかけて成立した『義経記』の「如意の渡にて義経を弁慶打ち奉る事」の一段が、謡曲「安宅」に翻案されたものである。『義経記』ではこのエピソードが越中の如意の渡のできごととして記されているが、謡曲では安宅の関でのエピソードに置き換えられたのである。

参考までに『奥の細道』と『奥細道菅菰抄』を確認したところ、両書には安宅の関に関する記述がない。松尾芭蕉が同地を通った元禄二年(一六八九)にも、『奥細道菅菰抄』の著者箕笠庵梨一が同地を訪れた安永五年(一七七六)頃にも、安宅の関は存在しなかったと推測される。

一方、鶴山と同時代の人である加賀藩士富田景周(一七四六—一八二八)が寛政十三年(一八〇一)に著した『三州志故墟考』には、安宅の関についての次の記述が見える。

文治ノ比、義経ノ為ニ新関ヲ設ト云モ、古ノ関趾ニ掘テ置シ成ベシ。遐陬ノ国ユヘ、史ノ闕文惜ムベシ。昇平久キユヘ、古ノ城跡、方今ハ似タル所モ無ク、瀬海ノ官道変革シテ古ニ異也。安宅ノ関名ハ、八雲御抄ニ載サセラレタリ。  
〔『三州志故墟考』<sup>1)</sup> 卷三、加賀州・能美郡・安宅〕

文治(一一八五—一一八九)の頃、指名手配され

た義経を捕らえるために安宅に新しく設けられたという関所は、古の関所の跡に置かれたはずであるが、僻地ゆえに史書には記録がなく、また平和な時代が長く続いているため古の城跡は当時すでにわからなくなっていたことが記されている。そして安宅の関の名は、順徳天皇の撰で鎌倉時代最大の歌学書とされる『八雲御抄』に載っているという。安宅の関の故地が鶴山の眼にどのように映ったかはわからないが、鶴山は必ずや当地で義経や弁慶、富樫らの姿がありありと幻視して、歴史のロマンを感じたことであろう。

鶴山は儒者であると同時に武士であり、武家の歴史に強い関心を有していた。本稿では紙幅の都合により漢詩二首のみを取りあげたが、ほかにも篠原(現在の石川県加賀市篠原町)では、「篠原」(作品番号535)を詠み、当地で木曾義仲と戦って討たれた老将斎藤実盛を追悼した。越前(現在の福井県)の敦賀では、『太平記』に登場する古戦場、金ヶ崎城趾を題材とした「角鹿港」(作品番号537)を詠んでいる。また、武田信玄の軍師と伝えられる山本勘助の伝記「山本道鬼伝」(作品番号23)や、真田幸村を論じた「幸村論」(作品番号19)も著している。

【注】

(1) 国文学研究資料館・三井文庫旧蔵資料。新日本古典籍総合データベースにて画像を確認することができる。

## 『草場佩川日記』にみる儒者の子育て

佐賀県立佐賀城本丸歴史館 芳野 貴典

江戸時代の父親は積極的に子育てを行っていた、と巷間言われるようになって久しい。それに「イクメン」の語を当てるのは、当時と今では父親による子育ての意図も取り組み方も大きく異なる以上やや不正確であろうが、父子の有り様が近世と近代以降とは異なっているのは確かである。

草場佩川(一七八七―一八六七)の日記には子どもに関する記事が多く見られ、佩川の我が子に対するまなざしや接し方が示されている。それは近世期における一人の武士、そして儒者の育児日記として見ることができないのではないかと思う。本稿では、のちに「佩川の肖子」と呼ばれるに至った長男・船山(廉、幼名は良太郎)の例を中心に見てみたい。

佩川には五人の子ども(二男三女)がおり、文政二年(一八一九)生まれの船山は第二子にして長男である。彼が生まれた七月九日条は「夜将午児生」とあつさりした記述だが、その後の日記には折々に父の顔をのぞかせている。船山二歳の時には「児初能箕踞」と初めてお座りしたことを書き留めている(文政三年二月二七日条)。また船山のために葛衣(葛の繊維で織った単衣)を拵えたり(同五月三日条)、涼傘を作ったり(文政四年七月一四日条)と暑い夏

を幼子が乗り切れるよう心を配った。親戚を招いて誕生日を祝う宴を催したこともあつた(同八月九日)。

子どもの成長にはちよつとした病気がつきもので、比較的健やかに育った船山も例外ではない。「良太小恙」(文政五年六月一日)、「夜良太発熱齒痛」(文政六年四月二九日)と気を揉んだ。ちなみに、この頃日本ではまだ牛痘種痘は行われていなかったが、船山一〇歳の時に「洗痘」を請うた記事があり(天然痘のことを江戸時代には「いも」、疱瘡除けの祈願を「いもあらい」と呼んだ)、天然痘への罹患を避けるべく何らかの医療ないし呪術・宗教的行為を行っていた様子がうかがえる。

いわゆる七五三に代表されるように、子どもの成長は節目ごとに祝われ特別な儀礼が行われる。人生儀礼、あるいは通過儀礼と呼ばれるものである。船山は七歳になる目前の時期に領主から肩衣二着と裳一着を賜った(文政七年二月二八日)。その一年後には佩川が船山のために「太刀」を買い求めている(文政八年一月二日)。領主へのお目見えは一三歳の時で、佩川は二日の暇を乞うて供の吉十を引き連れて佐賀城内の多久屋敷まで付き添った(天保二年一月三〇日、二月一日)。

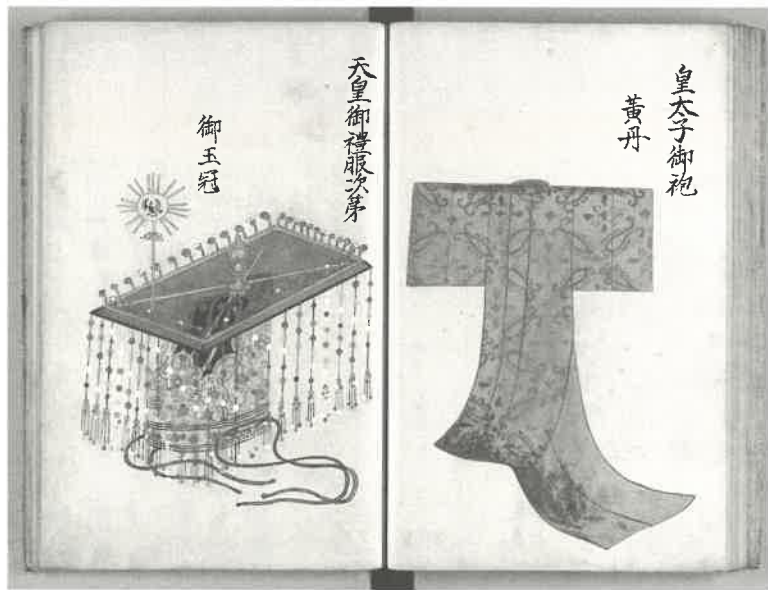
佩川は朝鮮通信使から「天下の奇才」と称えられするなど幕末佐賀を代表する碩儒であった。それゆえ船山が相応の年齢、今でいう学齢期に入ると待ちかねたように学問教育に力を入れ始める。二歳で父を亡くし三歳から母の口授で和歌を諳んじたという自らの生い立ちからくる教育熱もあつただろう。佩川による船山への教育の最初の記事は「良太始讀書記 大学経文、指字不錯」というものである(文政七年三月一日)。船山は六歳で四書の一つである『大学』の読み書きを始め、指で字を指しながら間違えずに読めたことが分かる。半年経つと『大学』は終えて『論語』に移った(同閏八月一日)。その後、九歳の時には『詩経』を学ばせている(文政一〇年一月二日一六日)。

詩作の訓練も様々なかたちで行われたと思われるが、日記に頻出するのは佩川が自らの詩稿を書写させ、或いは詩草を集録させた記事である。「使阿良別贈贈韓詩文」(天保七年五月一日)、「阿良贈完壬辰春稿一卷」(同三〇日)、「課児輯録秋来詩草」(天保九年一月三日)などである。このうち「壬辰」は天保三年のことであるから、およそ四年前にしたためた詩稿一卷を書かせたことになる。一方で、直近数ヶ月の間に書きためた詩草の集録も任せた。船山にとっては詩の素養を涵養する機会、そして佩川自身にとっては日々生み出される膨大な詩をまとめる機会となっていたのである。『佩川詩抄』などはこ

うした作業の果てに出来上がった。同詩抄は船山と弟の西山が編集した。例言で船山が述べたところによると、佩川は六三歳時点で一万五千首超、巻数にして二五〇巻の詩をもつる多作ぶりであったが、当然作る一方であつたらうから、信頼に足る力量の編集者が身近にいたことは心強かつたに違いない。

佩川といえは墨竹図をはじめとする画を能くしたことでも知られる。そのため絵についても自ら指導役を務めたようである。船山は一六歳の時に『装束図式』なる書物を写した（天保五年二月八日）。同書は宮廷装束の図解本で、刊本ながら装束の色や模様が細かく紹介されている。これを写すことは有職故事の知識の習得に資するとともに絵を描く練習にもなったであろう。佩川が出した課題だったと推察される。また、三十六歌仙絵の下絵を佩川が描き、着色を船山が佩川に手助けしてもらいながら取り組んだこともあつた（天保七年一月二二日）。

こうした懇ろな子育ての結果、船山は家職を継ぐに足る一人前の人物へと成長した。佩川が弘道館教諭に取り立てられ本藩出仕となつたため、多久領における家禄を継承するとともに東原厩舎で教官デビューを果たしたのである（天保八年二月二〇日）。時に船山数え年一九歳であつた。



『装束図式』  
国会図書館  
デジタルコレクション

## 多久の歴史と文化を学ぶ講座

市内外から素晴らしい講師陣を迎え、それぞれの専門的見地から多久を知ることができます。

会場 東原厩舎

時間 13:30~15:00

受講料 500円/各1回

定員 50人

10/15(土)

### 「遺香堂繪像水滸傳」にみる水滸傳の世界

「水滸傳」は、北宋末期、百八人の好漢が梁山泊へ集結し大活躍する物語です。多久市郷土資料館所蔵の『繪像水滸傳』は「遺香堂」という出版元から出版され、全巻そろった遺香堂本は世界中で多久市郷土資料館所蔵本しか確認されていません。この貴重な本から、一大活劇『水滸傳』の世界を紹介します。

講師 多久市郷土資料館  
学芸員 志佐 喜栄

11/19(土)

### 草場佩川と鹿島 ～文事が繋ぐ交流～

江戸時代、多良海道の要衝に位置していた鹿島藩には、佐賀諸藩の文人達が往来し、活発な交流の舞台となっていました。文事を通じた交流の姿をもっとも詳細に現在に伝えているのが草場佩川の遺した史料群です。講座では、佩川自筆史料をもとに、佩川と鹿島の交流を紹介します。

講師 鹿島市民図書館  
学芸員 高橋 研一

2023/1/28(土)

### 戊辰戦争と多久

慶応4年(明治元年)、関東・東北地方を中心に激戦が繰り広げられた戊辰戦争には多久領からも兵が出され、その動向は戦局に重大な影響を与えました。知られざる戊辰戦争と多久との関わりを様々な資料から明らかにします。

講師 佐賀県立佐賀城本丸歴史館  
学芸員 芳野 貴典

※この講座の事前申込は不要です 受講希望の方は、当日東原厩舎へお越しください

孔子の教えを学び伝える子どもたち

# 孔子の里ジュニアガイド



多久聖廟を訪れた人たちに、その歴史や周辺を案内する「孔子の里ジュニアガイド」。今年で18年目を迎え、多くの子どもたちが地元・多久聖廟の魅力を伝えてきました。孔子の教えを学び伝える子どもたちの活動を紹介します。

## 孔子の里 ジュニアガイドとは

多久聖廟を訪れた観光客に「みなさま、ようこそおこしくございました！ガイドを聞いてみませんか？」と声をかけ、聖廟の歴史や孔子像、周辺の石碑などを案内します。

難解な言葉や論語を使いながら堂々と案内する姿に、大人たちは感動し、ガイドが終わると温かい拍手に包まれます。

孔子の里ジュニアガイドは、子どもたちの自主性を育てることを目的に平成17年から始まりました。ガイドをしているのは義務教育学校の3〜6年生で、現在は、10名ほどいます。

子どもたちは入学すると、3ヶ月かけて教本の内容を勉強し、暗記します。難しい言葉が並びますが、一生懸命勉強し、ガイドとしてデビューします。

## 主体性を育て

多久聖廟の歴史を覚え、ガイドとしての心得も身につけたジュニアガイドたちは、どんな観光客に声をかけていきます。しかし、断られることも多いです。断られることもガイドのうち。その経験をすることで、聞いてもらえるありがたみや、へこたれない精神力などが持てるようになります。その他にも、立ち位置や話し方、身振り手振りなど課題を見つけ、より良いガイドをしようとする子どもたちを見ると成長を日々感じます。

また、ここ数年コロナ禍で実施できていませんが、ガイドの勉強のため、他の子どもボランティアとの交流会なども行い、ガイドに磨きをかけています。

## 子どもたちの可能性を開く

ジュニアガイドが始まって18年が経ち、たくさん先輩ガイドが誕生し、最近では子どもたち同士で教え合うようにもなってきました。多久聖廟は多久市の観光名所なので、みんな愛着を持ってもらえたらと思います。また、現在、コロナ禍でガイドの活動も制限がある中で、新たな方法なども考え、落ち込むことなく、更にパワーアップした孔子の里ジュニアガイドを観光客に見ていただきたいです。

また、今年は、一般社団法人佐賀県観光連盟から、観光功労者として表彰していただきました。観光振興活動が認められ、大変嬉しいと思います。そのような評価を励みに、今日も子どもたちの元気な声が多久聖廟に響いています。





茂文公は、学問所・東原厩舎を創りました。東原厩舎を卒業した人達の中には、電気工学博士の志田林三郎、明治刑法の創案者・鶴田斗南、石炭王と言われた高取伊好などがいるんです!!

この石に刻まれている名前は、孔子様の家系です。現在、79代目の孔垂長さんまで刻まれています。

垂長さんは、現在台湾に住まっています。80代目は、まだ決まっていますが、息子さんの佑仁くんがなる予定です。



この門は、仰高門といまして、各地の孔子廟に建てられています。孔子様の弟子・顔子が、孔子様の人柄を称えて、「先生の徳は見上げるほど高く、書物を用いて幅広い知識を教えてください、礼儀を用いて私たちを導いて下さい。先生は高い所にそびえ立って居られるような方です。」と言っています。



ここが国重要文化財多久聖廟です。1708年、多久の4代領主・多久茂文公が、孔子像を安置し、領民たちに「敬」の心を育てるために建てました。多久聖廟は日本三大孔子廟といわれています。

多久聖廟では、春と秋の年2回、釈菜という伝統行事があります。雅楽が奏でられる中、孔子様と四配の像に、お供え物をする儀式です。この釈菜は、佐賀県重要無形民俗文化財となっています。廟の中には、春と秋の釈菜のとき以外は、入ることができません。みなさんどうぞ、春は、4月18日、秋は10月第4日曜日に、おいでください。



孔子の里ジュニアガイド活動について

活動日 毎月第2・4土曜日

活動時間 10:00 ~ 12:00

ガイド料 無料

多久家文書

『水江事略』(翻刻文) 紹介 10

公益財団法人孔子の里 理事 服部政昭

水江事略巻之五

長信公譜之四

天正十二年甲申ヨリ  
天正十九年辛卯ニ至ル

天正十二年甲申 長信公御年四十七

二月龍造寺ノ軍士高木表ニ在テ度々有馬ト戦ヒ威ヲ振フ有馬義純重テ援兵ヲ嶋津義久ニ乞三月義久舎弟中務太輔家久ヲ遣シテ有馬ヲ救ハシム家久兵三千餘ヲ率ヒ有馬ニ押渡リ安徳ノ城ニ入ル

御年譜 高来ノ有馬左衛門佐鎮貴安徳上総介純俊カ方ヨリ嶋津義弘ノ肥後ノ旅陣ニ重テ加勢ヲ乞義弘ヲ乞義弘サラハ軍兵ヲ差越ベシト其比新納武藏守忠元カ御船ニ在ケルヲ高来ニ差遣ス忠元急キ高来ニ押渡リ先有馬ニ參會シ安徳ノ城ニ入ル

三月隆公分國ノ兵四萬餘騎ヲ率ヒ有馬ニ御発向有馬ヲ討亡ボシ直ニ薩摩ニ御渡海アリテ嶋津ト戦ヒヲ決セラレント思召ナリ我公ハ隆公ノ命ニ依テ多久城ニ留リ下総守康房ヲ大物頭トシテ高木ニ遣ハサル家久公ハ折節御病氣ニテ後陣ニ從ハル二十四日隆公薩摩勢ト御合戦御利運ナクシテ御生害有爰ニ於テ下総守ヲ始メ我軍士驚崎福地堤徳久以下數多討死ス味方惣敗軍ト成政家公ハ龍造寺ニ歸リ信生公ハ御歸城有

御戦功記 龍造寺六郎次郎敗軍ノ内ヨリ引返シ類ニ敵方ヘ進ム側ニ付居ル成富又左衛門ケ

様ニ敗軍ノ退口ニテ犬死ニスル者ニテ無之由申馬ノ口ヲ取引戻ス六郎次郎拳ヲ握リ又左衛門カ頭ヲ打猶取テ返サントスレトモ家人福地藏人西岡覺右エ門中嶋彦左エ門木下進士允馳塞リ押立テ引取ヌ此時敵二三人慕ヒ来ル又左エ門先ニ進ミ敵二人ヲ岸ヨリ下ニ突キ落シ六郎次郎カ馬ノ口ニ付漸ク海邊ニ出ケルカ多久領山口ノ地土田嶋彦左エ門嶋原ノ軍心元ナク船ヲ用意シ參着スル故主從此船ニ取乗テ山口ニ漕返ル福地藏人ハ濱手迄供致シ船ニ乗セ立歸テ申様我等早思ヒ置事ナシ早々船ヲ出スベシ某等爰ニ止リ戦死イタス覺悟ノ由申置又傍輩又左エ門ヘ面頰ノ下ヨリ咽輪ヲ解キ頼ミケルハ父福地宇右エ門祇園原ニ於テ周家公ニ從ヒ戦死ノ時我等ニ形見トシテ傳ヘ置タリ願クハ此咽輪ヲ我子宇右エ門ヘ相傳ヘ度由懇ニ相頼ミ置敵陣ヘ切入戦死ス南里三郎左エ門石井源左エ門ハ下総守同前陣ニ在後陣ハ小人數ニテ安否心元ナク立歸ル所ニ敵六人追来リシヲ打散シ兩人共疵ヲ被リ漸ク海邊ヘ出六郎次郎ヲ尋ルニ山口田嶋カ船ニ乗歸リタル由承リ傳ヘ心安ク存シ船一艘奪ヒ取多久ヘ乘歸ル石井孫七郎モ此節力戦シ組打ニテ分捕ス八戸掃部佐一所ニ於テ見分スト云

九州記 多久ノ家久ハ討死セシト進ミシヲ一族下総守押止メ自ラ是ニ代リ主從七人戦死スト 諸手戦死ノ侍都合二百三十餘人雜兵八百餘人大友義統隆公嶋原御戦死ヲ聞テ大ニ是ヲ幸トシ大軍ヲ催シ筑後表ニ出張セシム

九月戸次道雪高橋紹雲筑前ノ兵ヲ率ヒテ豊後衆ニ筑後ニ會ス嶋津兵庫其弊ニ乘シ肥後筑後ヲ略セントテ三萬餘兵ヲ率ヒ熊本ニ來陣ス猶又兩筑

西肥ノ諸城主ヲ催促ス 政家公ヨリ家久公ト龍造寺家晴ヲシテ肥後ヲ守ラシム両家ノ軍南ノ関ヲ守ル是ハ嶋津勢出張ニ依テ押ヘノ為ナリ秋冬ノ比嶋津ト龍造寺和平ニ依テ家久公家晴ト共ニ肥後ヲ去ル

同十三年乙酉 長信公御年四十八

八月二十八日(一二二六日トモ)鍋嶋駿河守清房公御卒去(御年七十二)直茂公ノ御父ニシテ慶闇夫人後ノ御連合ナリ剛意金公ト諡ス爰ニ於テ慶闇夫人御落飾ヲ落サル

十一月我公ノ領地尼寺村大昌寺ノ薬師堂造立有國家安全ノ為ナリ住持ハ比丘源秀郷士河原左馬允久賢ナリ(大工王孫右京助義充小工若干ナリ)

勅使下向有テ諸國ノ干戈ヲ止メシム嶋津大友龍造寺各和議ヲ調ヘ神文ヲ出シ人質ヲ取替ハス大友宗滴(宗麟改名)上洛シテ関白秀吉ニ訴えフ秀吉是ヲ許ス饗應シテ股差ヲ賜ハリ君臣ノ義ヲ約ス

同十四年丙戌 長信公御年四十九

関白秀吉公嶋津ヲ征セラレントテ諸國ノ軍兵御催促アリ秋冬ノ比毛利輝元小早川隆景先陣トシテ大軍ヲ率ヒテ九州ニ渡ル黒田孝高安國寺宮木入道軍監トシテ先達テ下向ス殿下隆景孝高二命シ政家公及ヒ御一族並九國諸城主ノ人質ヲ納レシム政家公ノ御母(御法号宗閨)御人質トシテ大坂ニ登ラル

十二月政家公筑後ノ國ノ敵三池蒲池等ヲ伐テ功ヲ立ラレントテ諸家ノ軍兵ヲ催促セラル我公ニ遣サル状ニ曰

惣ト言上候仍而正月二日王筑後表諸勢差渡候乍御 太藤右同日諸人歎被差出可然候飛驒守



陣所可為瀨 高儀行様体可有御相談此謂可預  
御披露候口恐々謹言

十二月廿九日

龍造寺民部太輔 政家 在判

同十五年丁亥 長信公御年五十

正月二日政家公軍勢二万ヲ遣シ筑後ノ三池ヲ御  
征伐有家久公多久ノ兵ヲ率テ御馬ヲ出サル鍋嶋  
信昌公諸軍ノ長タリ火ヲ放テ三池ノ封内ヲ焼ク  
殘ル所僅ニ一ヶ城ノミ翌三日山下ノ城ニ向ハル  
小田本田平田及矢原町等ヲ放火シ進テ南ノ関ヲ  
守ル

三月関白殿下十萬餘ノ大軍ヲ率ヒ御西伐有二十  
八日御渡海四月七日高良山ニ御陣ヲ居ヘラル政  
家公直茂公ト共ニ御參陣有テ薩摩入ノ先鋒ヲ請  
ハル殿下是ヲ許シ玉フ政家公三万ノ兵ヲ率ヒテ  
御進發家久公多久ノ兵ヲ率ヒテ先隊ニ列セラル  
同十三日殿下南ノ関ニ御陣ヲ進メラル爰ニ於テ  
慶闈夫人御使ヲ遣サレ土産ノ品ヲ献セラル殿下  
御志ノ御深切ナルヲ御感有テ御直書並具服等ヲ  
賜ハル其文ニ云

あん國寺かたへふみのとほり御覽なされ候  
こんと志まつ御せひはいとして御とふ座な  
され候事一入まんそくのよしまことにたか  
のよかたきの事に候あいた尤とふひんに思  
めされ候しまつ一類かうへとほねられ見せ  
させられいよくうつふんをハラさせられ  
候可候又色々いんしん祝おほしめし候  
猶あん國寺申へ候 已上

卯月十五日 御朱印

りうさふ寺たかのふ

はるかたへ

殿下進テ薩州千代川ノ邊太平寺ニ御陣ヲ居ヘラ

ル慶闈尼重テ御使者ヲ遣サレ御陣中ノ御見舞ト  
シテ御酒肴ヲ献セラル殿下又御直書ヲ以テ是ヲ  
報セラル其文ニ云

御らん見まいとしてあん國寺にたいし文こ  
とにいろくならひにたる廿おくりこしよ  
ろこひおほしめし候しまつ御せひはいの事  
さためてまんそくに候付候をおくあん  
國寺かたより申まいらせ候 かしく

五月一日 御朱印

けい関かたへ

五月上旬嶋津義久力盡テ終ニ殿下ニ降參ス殿下  
是ヲ許シ則其國ヲ削リ今ノ地ヲ封シ夫ヨリ筑前  
ニ御動座數日箱崎ニ御在陣爰ニ於テ九國諸將ノ  
配分アリ各御朱印ヲ賜ハル我公及江上種家後  
藤家信龍造寺安房守同越前守等御一族ノ頭分ノ  
人々殿下ニ見ヘシハ此時ナラン殿下是ヲ以テ龍  
家ノ附庸トス七月上旬御歸洛  
八月肥後國佐々陸奥守カ領内宇同隈部カ輩一揆  
ヲ企テ山鹿ニ起ル殿下近國ノ諸將ニ命シテ是ヲ  
退治セシム御家ヨリモ頭分數人肥後ニ出陣ス家  
久公多久ノ兵ヲ引テ御馬ヲ出サル

同十六年戊子 長信公御年五十一

二月肥後ノ一揆没落ス御當家ノ軍和仁部原ヲ破  
攻リ勲功拔群ナリ諸將各歸陣有

同年冬太守政家公(肥前侍從ト号)公邊ノ御勤  
御難波所有セラルニ依テ國家ヲ直茂公ニ御讓有  
ントノ思召ナリシカ共直茂公固ク是ヲ辞セラル

同十七年己丑 長信公御年五十二

今年九州諸國檢地有

同十八年庚寅 長信公御年五十三

三月太守政家公鈞命ヲ蒙ラレ御國家ヲ直茂公ニ  
御讓リ長子藤八郎高房公ヲ直茂公ノ御養子トセ  
ラル

同月七日我公殿下ヨリ御知行ノ御朱印ヲ賜ハル  
左ノ如シ

小城郡ノ内

多久 別府 納所 北浦 深河 江里山

初田ケ里

杵嶋郡ノ内

志久 北方 醫王寺 福母 喜佐の木

大渡 焼米 山口 砥川 椴嶋

佐嘉郡ノ内

尼寺の内 上嘉瀬 萩野 八戸 真木

木原 竹藤 南里 新郷 鹿子

三根郡ノ内

矢俣

以上都テ高知行三萬二千八百餘石ナリ

(此時五成) 本祿二万六千四百餘石ナリ

今年我公御剃髮成サレ法名ヲ天理ト称セラル是  
ヨリ以後御家政ヲ家久公ニ御讓リ成サル

同十九年辛卯 長信公御年五十四

三月豊臣殿下肥前筑前及九州ノ諸大名其他諸國  
ニ命セラレ一城ヲ松浦ニ築カシム是ハ追々朝鮮  
ヲ征セラレン為ナリ

多久ハ殊ニ鄰境ナルヲ以テ數百ノ人夫餘多ノ材  
木ヲ出シテ普請ヲ勤ム龍造寺又八郎久重ヲ奉行  
タラシム名古屋の城ト云是ナリ

一説ニ天正十八年庚寅三月ニ普請始ル此時殿  
下ヲ称シテ太閤ト云

(以下 次号に続く)

# 東原庠舎学制に関する

## 一考察

多久市郷土資料館学芸員 山口佐和子

「東原庠舎」と呼ばれる多久の郷校の変遷をたどれば、その時々で組織や学科、試験などの仕組みについて、また学則が明文化され残されている。今回は東原庠舎の学則である「東原庠舎学制」の七条の附(つけたり)から、これまで東原庠舎について一般的に言われてきた、「百姓町人の身分の差なく誰でも入学できた」というとらえ方について、例をあげ考察を加える。

※郷校のよび名は時代などによって変遷するが、ここでは東原庠舎として統一表記する。

「東原庠舎学制」は、東原庠舎の学則である。七か条が上げられ、当時は学寮の壁に貼られていた。その内容については、尾形善郎著『「東原庠舎学制」考』に全文翻刻が、『多久市史』二巻近世編に意識が掲載されている。

現在、「元治元年子九月(一八六四)の奥書がある「東原庠舎学制」の卷子本が多久市郷土資料館に「聖廟資料」として所蔵されている(写真)。

その成立年代は、奥書が差し換え、または付け加えられていることから元治元年より以前と推測される。尾形氏は『「東原庠舎学制」考』(一九九五)において、その成立年を「東原庠舎規則」

に奥書されている文政六年(一八二二)よりも後、多久茂族の改名によって「東原庠舎学制」の奥書が書き改められたという記述が弘化四年(一八四七)二月十五日の「日記」に出てくるので、それ以前としている。ただこれは「東原庠舎規則」が成立した後に「東原庠舎学制」が制定されたと考え、この二十四年間のいつか、という事だが、それを示す具体的な史料は現在の所見つかっていない。しかし、弘化二年(一八四五)十一月十五日に東原庠舎が火災に合い、壁書は無事だったが、翌年から校舎の再建が開始され弘化三年(一八四六)四月に新築棟上げをし、弘化四年一月十日に学寮が開講している。この間に壁書が改められて、新たに「東原庠舎学制」が作られたと推測される。

「東原庠舎学制」の附条文は次のとおりである。

### 附離百姓町人志次第師範江申達学舎道場江可

#### 相勤事

簡単に意識すれば、「百姓町人といえども、志次第で師範に申し出て学舎や道場で学びなさい」と書かれている。この条文では、「学舎」と「道場」という言葉を使っている。「道場」は文武両道の精神に基づいた武道を学ぶ場であるが、学舎とはいわゆる分校をさす。東原庠舎には本校の他に三か所の分校があつて、上田町・笹原の学舎は元禄十二年(一六九九)の東原庠舎の設立から一三三年後の文化九年(一八一二)に設立されている。志久の学舎はそれより更に後の安政六年(一八五九)に設立されている。

『御屋形日記』などの文中では、東の原にある東原庠舎本校を指して「学寮」「学館」という言葉が使われ、上田町・笹原・志久の分校を「学舎」と呼んでいる。この言葉は明確に区別があり、例外的に東原庠舎本校の建物そのものを指して「学舎」と呼ぶことがあるが、東原庠舎の学校組織を指す時は「学寮」「学館」という言葉が用いられている。『御屋形日記』嘉永二年(一八四九)十二月九日の条では学寮と学舎が併記されており、二つの言葉が別々の意味を持っていたことがわかる。このため、「東原庠舎学制」「附」は、百姓町人は上田町・笹原の分校に通うようにという条文であるとも受け止められるが、成立時期の問題は残る。「附」が「東原庠舎学制」が成立した時点で既にあったのか、後に加えられたものなのかについては、いくつかの可能性がある。「学舎」という言葉が指す意味を上田町と笹原にあった東原庠舎分校とすると、その二校は文政三年(一八二〇)に休学し、文政八年(一八二五)に再開、その後文政十一年(一八二八)七月から費用が工面できず生徒が少ないなどの理由で廃止されており、弘化四年十月に再開されるまで存在しない。「東原庠舎学制」が弘化三年の校舎再建時に作られ、「附」も同時にできたと考えると、学ぶべき場所がない状態で附の条文を作ったことになる。あるいは、その時点で再建が内定しており附をつけたとも考えられる。もちろん、分校が運営されなかった可能性もあるし、「附」だけが弘化四年以降に作られた

可能性もある。

この「附」を根拠として『多久市史』などでは士分以外の者も東原庠舎に入学できたとしている。現在東原庠舎の入学者名簿などの資料は見つからないが、『御屋形日記』などに、他領からの入学希望者の許可に関する記述や、東原庠舎での表彰者に関する記述が残されている。安永五年（一七七六）九月から東原庠舎には他領の者でも入学が可能になった。

他領からの入学者には、士分、僧侶、神職のほか、百姓が二人入学した記録がある。僧侶は他領からの入学者の半数を占めるが、町人や百姓と同じ被支配層の人々とは言い難く、入学に関して特別処置がとられていたと考えられる。では、東原庠舎に入学が許された二人の百姓について詳しくみてみよう。一人は有田皿山の太庄屋小嶋耕平子、唯助である。唯助は寛政九年（一七九七）の三月より一年間西ノ原の横尾政六宅から学寮に通っていたが、今一年延長したいとの願いを出して寛政十年（一七九八）四月に許可されている（『役所日記』）。小嶋唯助の親は有田皿山の太庄屋であり、学費や寮費を払うことが出来たと推察される。この時上田町・笹原の学舎はまだない。

もう一人は文化十四年（一八一六）十一月朔日、武雄湯町の百姓嘉助子、仁助で当年十一歳、多久蔵人の被官を通じて向こう三年間の入寮を願い出、許可されている。教師である草場達助（佩川）の確認もとれている。

一、武雄湯町百姓嘉助子仁助当丑拾壹歳相成候を只今向三ヶ年学寮定詰為仕度蔵人殿被官朝原機右衛門左兼々知音之由二而、相願被相伺候如願被差免候段御仰出草場達助相間下申候（『御屋形日記』）

二人の入学は「東原庠舎学制」成立よりも前であり、これを例外とみるか、一例と考えるかは判断が難しい。文化十四年の仁助が入学した時には既に上田町・笹原の学舎（分校）が開設されている（『丹邱邑誌』）が、東原庠舎本校に入学できた理由は定かではない。また、このような記録が残されているのが他領からの例だけであり、多久からの入学者には見つからない理由も、検討していく必要がある。多久からの入学者は記入者や役所にとって当然のことであり、特別記録する必要がないと思われるが、成績優秀者への表彰では、東原庠舎本校での表彰で、百姓町人が記された例は見つけられなかった。学舎では、安政などにその例がある。

また、多久領から東原庠舎本校に入学した百姓・町人の記録資料が見つかる可能性も否定できず、これからの課題である。しかしながら、近世の身分制度は、現在の我々が思うよりも厳然として存在していたと考えられる。その中で、東原庠舎の独自性を見出すことができればよいと考えている。

「東原庠舎学制」七条と附、奥書



↑ 附（つけたり）

# 来訪・来信・雑録

- 4月13日 春季稲葉学校関係者事前練習
- 4月15日 春季稲葉総練習
- 4月18日 令和4年多久聖廟春季稲葉
- 5月9日 令和4年度第1回理事会
- 5月24日 令和4年度定時評議員会
- 6月4日 鶴山塾「古文書を学ぶ(入門)①」  
(講師：舌間輝吉 多久古文書の村村民)
- 6月4日 鶴山塾「中国古典の扉①」  
(講師：武田耕一 公益財団法人孔子の里理事)
- 6月7日 有田町同朋保育園来訪(論語素読会)
- 6月8日 北岡義彦 高知県佐川町教育研究所長・片岡貢 佐川町立尾川小中学校校長ほか来訪
- 6月17日 評議員選定委員会
- 6月18日 鶴山塾「古文書に親しむ①」  
(講師：山口佐和子 多久市郷土資料館学芸員)
- 6月18日 鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」  
『草場佩川の「山野」善(其の一)』  
(講師：中尾友香梨 佐賀大学教授)
- 6月22日 ゆい工房「本格そば打ち(前期)」  
(講師：岸川和則 塩田津ソバの会)
- 7月2日 鶴山塾「古文書を学ぶ(入門)②」  
(講師：舌間輝吉 多久古文書の村村民)
- 7月2日 鶴山塾「中国古典の扉②」  
(講師：武田耕一 公益財団法人孔子の里理事)
- 7月12日 令和4年度 第1回国重要文化財建造物 多久聖廟保存修理検討委員会
- 7月13日 ゆい工房「アロマスプレー作りとリンパケア」  
(講師：古賀公子 日本アロマ環境協会アロマインストラクター)
- 7月16日 鶴山塾「古文書に親しむ②」  
(講師：山口佐和子 多久市郷土資料館学芸員)
- 7月16日 鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」  
『石井鶴山の「倉永先生行状」を読む』  
(講師：中尾健一郎 熊本大学大学院教授)
- 7月31日 ゆい工房「夏休み子ども企画」  
『ふんわり指で描く かんたんパステルアート』  
(講師：林口操 パステルアートインストラクター)
- 8月3日 渡邊義浩 学校法人大隈記念早稲田佐賀学園理事長来訪
- 8月6日 鶴山塾「古文書を学ぶ(入門)③」  
(講師：舌間輝吉 多久古文書の村村民)
- 8月6日 鶴山塾「中国古典の扉③」  
(講師：武田耕一 公益財団法人孔子の里理事)
- 8月23日 東原座舎消防訓練

## ◆ 賛助会員入会の案内 ◆

本法人では、重要文化財多久聖廟及びその周辺に所在する史跡等の保全とすぐれた自然条件との調和のとれた開発を推進し、快適な環境の醸成と、由緒ある文教の地に適応した学芸文化の研鑽振興及び普及を図り、もって地域の活力ある発展に寄与することを目的として活動をしています。  
ご賛同いただき、ご入会ご協力をお願い致します。

- 会員の種類
 

個人賛助会員	年会費	一口	3,000円
法人賛助会員	年会費	一口	10,000円
- 入会申込み・お問い合わせ  
〒846-0031 多久市多久町1843番地3 東原座舎内  
公益財団法人 孔子の里 事務局  
電話 0952-75-5112 FAX 0952-75-5320  
E-mail ko-si@po.taku.ne.jp  
詳細は当財団ホームページ  
をご覧ください。



- 8月27日 鶴山塾「古文書に親しむ③」  
(講師：山口佐和子 多久市郷土資料館学芸員)
- 8月27日 鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」  
『「旧高取邸」と高取伊好』  
(講師：田島龍太 松浦史談会事務局長)
- 9月1日 ゆい工房「折り紙で素敵な笑顔を〜月見うさぎづくり〜」  
(講師：青柳伊都子 日本折紙協会佐賀支部長)
- 9月3日 鶴山塾「古文書を学ぶ(入門)④」  
(講師：舌間輝吉 多久古文書の村村民)
- 9月7日 史跡湯島聖堂、公益財団法人斯文会(東京都) 訪問
- 9月8日 史跡足利学校(栃木県) 訪問
- 9月22日 小城・多久地区テロ対策パートナーシップ総会及びテロ対処訓練
- 9月24日 鶴山塾「古文書に親しむ④」  
(講師：山口佐和子 多久市郷土資料館学芸員)
- 9月24日 鶴山塾「中国古典の扉④」  
(講師：武田耕一 公益財団法人孔子の里理事)
- 9月26日 令和4年秋季稲葉委員会

## 編集後記

今号は、「孔子の里ジュニアガイド」の活動を特集として6ページに紹介しています。子どもたちは、毎月第2・4土曜日の午前中、孔子の教えを学び、観光に伝える活動を行っています。ぜひご覧ください。



9月7日に東京都の湯島聖堂、8日に栃木県の足利学校を訪問しました。史跡を保存管理し、史跡を活用した取り組みが行われている「公益財団法人斯文会」及び「史跡足利学校事務所」のご担当者から、それぞれ、歴史環境の保全や活用事業等について詳しく説明いただきました。現地直接説明を聞き、情報交換できたことは、たいへん有意義なものであります。今後の孔子の里の活動に活かしていきたいと思っております。

朝夕の涼しさに秋を感じる時節を迎えました。多久聖廟周辺の秋を彩る木々たちは、年々美しさを増してきています。11月に見ごろを迎えます。多くの皆様にも、晩秋の多久聖廟を愛でただければと願っています。



(ほ)